

派遣者番号	R2K12	氏名	福島 翔
研究主題 —副主題—	「体づくり運動」における動きの幅を広げ高めるための教師行動に関する研究 —授業計画と授業の実際における教師の発話に着目して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	鈴木 聡
所属	墨田区立第三寺島小学校	所属長	福井 みどり

キーワード：体づくり運動 体力向上 教師行動 教師の発話 授業計画

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」では、小・中学生の体力合計点は低下しており、特に小学生の男子は過去最低の数値を記録した。このような結果は、「授業以外の運動時間の減少」や、「スクリーンタイムの増加」といった子供たちの生活環境の変化が要因と分析されている。こうした現状において、全ての子供に運動する機会を保障することのできる学校教育への期待は大きい。

しかしながら、子供たちの体力向上をねらって学校体育に導入された「体づくり運動」は、多くの教師にとって「指導しにくい」と捉えられていることが報告されている。そのため、「体づくり運動」における教師の「指導しにくさ」の要因である、目指す動きの「曖昧さ」を解消することが求められている。

基となるスポーツが存在しない「体づくり運動」では、体の様々な動きを身に付けたり高めたりすることが主なねらいとされている（文部科学省、2017）。したがって、「体づくり運動」における目指す動きの「曖昧さ」を解消するためには、子供たちの動きの幅の広がりや、動きの質の高まりについて教師がどのように捉えているのかを明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、「体づくり運動」の授業計画と授業の実際における教師の発話に着目し、その根拠を明らかにすることを通して、「体づくり運動」の授業における動きの幅の広げ方や動きの質の高め方について検討することを目的とする。

2 研究の方法

動きの幅を広げることを目的とした小学校3年生の「多様な動きをつくる運動」と、動きの質を高めることを目的とした小学校6年生の「体の動きを高める運動」の授業収録を行った（表1）。さらに、授業を行った熟達した小学校教師2名を対象として、授業前と授業後にインタビュー調査を実施した。授業計画と授業の実際における子供たちの動きに対する教師の発話や、授業後の自由な語りをそれぞれ分析し、熟達した教師の「体づくり運動」の授業計画と授業中の発話の根拠について解釈した。

表1 研究対象授業の概要

教師	T1	T2
実施時期	令和2年9月	令和2年9月
学年	3年生	6年生
児童数	28名	40名
授業内容	多様な動きをつくる運動 用具を操作する運動（ポール）	体の動きを高める運動 巧みな動きを高める運動（なわ）
収録時数	4時間	1時間

3 研究の結果

(1) 動きの幅を広げることを目的とした授業

「多様な動きをつくる運動」は、小学校の体育授業では運動技能を身に付けさせるよりも、運動の楽しさを味わわせることで、運動に親しみ続ける子供を育てたいという教師の授業観に基づき、「遊び」の要素を取り入れ、子供たちを自由に運動させる授業が計画された。一方で、教師は子供たちの自由な動きを学びとして方向付けることができるよう、「経験させたい動き」や、全体共有で「取り上げたい動き」を授業計画の時点で決めていた。授業中は、「経験させたい動き」や「取り上げたい動き」を基準に子供たちの動きを観察して意思決定を行い、それに基づいた発話を使い分けていた。特に、「予約」や「価値付け」の発話を行うことや、「取り上げたい動き」を全体共有することにより、子供たちの動きの幅を広げることのかけ作りをしていた。

このような教師行動によって、「体づくり運動」の固有の運動様式をもたない特性を生かして子供たちの動き幅を広げることができると考えていた（図1）。

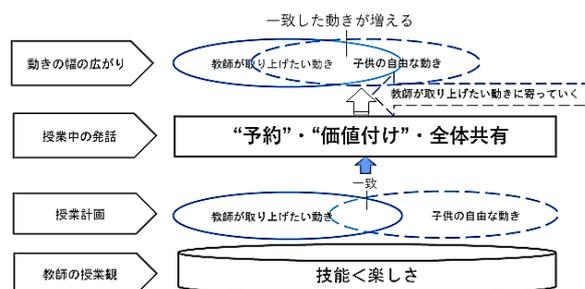


図1 動きの幅を広げるための教師の授業イメージ

(2) 動きの質を高めることを目的とした授業

「体の動きを高める運動」は、教師が子供の動きに対して適切な発話を行うことができれば、子供の必要感に合わせて柔軟な授業実践ができるという「体づくり運動」に対する授業観に基づき、「子供に運動を合わせる」授業計画がなされていた。加えて、それぞれの子供の体力や実態に応じて動きの質を高めることのできる運動課題が教師によって考えられていた。授業中は、運動課題の正しい動きのイメージを全体で共有し、個々に体の動きの高め方があることを確認していた。そして、運動課題に対して試行錯誤しながら運動する子供たちに、教師は発問を繰り返し、子供の応答に合わせて即座に意思決定を行った。つまり、子供たちの個別の課題や見つけたコツ、運動感覚を把握した上で、一人一人に合わせた発話を行う教師のもとで、子供は試行錯誤することで、動きの質を高めることができると考えていた（図2）。

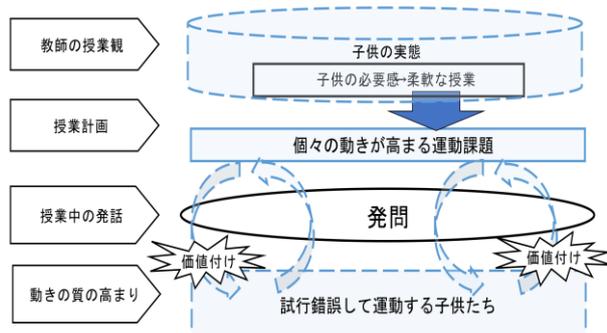


図2 動きの質を高めるための教師の授業イメージ

4 研究の考察

本研究により得られた知見は以下の通りである。

(1) どちらも発話により学びを方向付ける

熟達した教師は「体づくり運動」において、動きの幅を広げたり、動きの質を高めたりするために、発話によって子供たちの学びを方向付けている。

(2) 動きの幅を広げる“観察”→“意思決定”→“発話”の教師行動

熟達した教師は動きの幅を広げるために、授業計画の時点で定めた「経験させたい動き」や「取り上げたい動き」を基準に子供たちの動きを観察し、意思決定に基づいた発話を行っている。発話は、教師が考える「経験させたい動き」や「取り上げたい動き」に対して「予約」や「価値付け」、「称賛」が行われ、「発展性がない」と判断した動きに対しては「放置」を経て「修正」が行われた。

(3) 動きの質を高める「観察」→「発話」→「意思決定」の教師行動

熟達した教師は動きの質を高めるために、子供たちの実態に基づき、それぞれの体力に応じて動きを高めることができる運動課題を提示している。運動課題に対して試行錯誤する子供に、「発問」することによって個々の実態を把握し、子供の応答に対して意思決定を行い、動きの質の高まりを価値付けていた。

5 今後の展望

(1) 残された課題

本研究では教師を対象として分析を行ったため、子供たちの動きの変容や、授業の受け止め方については検討できていない。今後は、子供たちに焦点を当てて研究することで、本研究で得られた知見が子供たちの動きの幅を広げたり、動きの質を高めたりといった体力向上や、運動の楽しさを実感することで運動習慣の二極化の解消につながるのかを明らかにしていく必要があるだろう。

(2) 成果の活用法

本研究で明らかになった、「体づくり運動」の特性を生かした授業計画や、授業の実際における教師の発話について、所属校や所属する地域の体育部などを通じて広く還元していきたい。特に、本研究で得た知見に基づいた授業実践を行うことは、「体づくり運動」の授業づくりに不安を感じている教師や体育を専門としない教師に、研究の成果を分かりやすく伝えることができると考えている。

また、筆者は、実践者として残された課題の検討にも取り組む。本研究で得た知見が、個々の子供たちの動きの幅の広がりや、動きの質の高まりに寄与しているかについて調査し、子供たちがどのように受け止め、運動習慣にどのように影響していくのかについて分析していく。本研究で得られた知見をもとに実践することで、体力低下や運動習慣の二極化といった子供たちの抱える課題に対する直接的な手だてとして示唆を与えることができるように励んでいきたい。